フィールド（現場）からの風 564

宮田守男

旅の楽しみを創造し続ける 地域が求められている

明後日からは、早10月。縁起のいい月という意味の「陽月」「拾月」という呼び名もあるように、10月は収穫の喜びにあふれた月だと言われている。だが、9月後半は降雨が続きコメの収穫が思うように進まず、秋野菜の播種時期には豪雨に見舞われ、また秋の味覚の代表であるキノコは不作、リンゴ栽培農家からは小玉リンゴが多く前年収穫量が確保できないなどの暗い話題で、今年は収穫の秋の喜びを素直に感じることができない大北地域の農業実態だ。

だが、厳しい自然状況でも野草の生育には今年も驚かされる。昭和天皇が繰り返しいった言葉として伝わる「雑草という草はない」。侍従が庭を刈った理由に「雑草が生い茂ったため」を諭すように発し「どんな植物にも名前があり、人間の一方的な考え方で雑草と決めつけてしまうのはいけない」と。

奈良時代の歌人・山上憶良が詠んだ「秋の七草」はハギ、ススキ、クズ、ナデシコ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウだが、1935年東京日日新聞で7人の文化人が選んだ「新・秋の七草」は、コスモス（菊池寛）、オシロイバナ（与謝野晶子）、ヒガンバナ（斎藤茂吉）、ショウカイドウ（永井風香）、アカマンマ（高浜虚子）、ハゲイトウ（長谷川時雨）、キク（牧野富太郎）だったと佐賀新聞のコラム有明抄さんが紹介している。私が七草を選んだらと想いながら候補植物を求めて、これからの旅の楽しみに加えたらと思ってしまう。

インバウンドの回復から冬のシーズンの入り込みに期待が高まるが12月から3月の冬の予報で「この先も高温傾向が続くでしょう。今年の冬は寒気の南下が弱く『暖冬』となる見込みです。冬型の気圧配置も弱く、日本海側の降雪量は少ないでしょう」と発表された。物価高騰による家庭暖房費が心配な家庭には朗報だが、観光事業者には悲報に違いない。地球温暖化によるスキー産業などへの影響は今後も続くと考えるべきなのだろう。

総務省が発表した65歳以上の高齢者の人口推計でも80歳以上は10人に1人。高齢者は冬季観光の対象外と考えてはいけない状況でもある。インバウンドに大きく期待する誘客は、紛争などの世界情勢や地球規模の感染症など未知数も多いことは承知の事実だ。年間を見通した観光産業の新たな創造を地域全体で考えるべきなのだろう。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）

ニンニクにも獣被害が。害虫・害獣が嫌うニオイや成分の忌避（きい）作物は基本的に無い事を実感する